

『画本虫撰』上下2冊



『画本虫撰』より ばった・かまきり

ちようちよ、とんぼや、きりぎりす、山で、山で囀るのが、まつむし、すずむし、くつわむし、おちちよちよいのちよい、おちちよちよいのちよい。これは、「猫じゃ猫じゃ」としてよく知られる俗曲の元歌とされているもの。

ほぼ虫の名前だけで歌詞ができており、虫尽くしのような趣向の曲である。こんな俗曲にまで、虫の名前を散りばめていることは、日本人がいかに虫に親しんできたかを示しているといえよう。そもそも『古今和歌集』の仮名序には「はなになくうぐひす、水にすむかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」とあるし、真名序にも「かの、春の鶯の花中に囀り、秋の蟬の樹上に吟ずるがごとき、曲折なしといへども、各歌謡を発す」とある。言い方こそ違え、みみずだっておけらだつて、みんなみんな生きていてるわけで、生きてい

るものはすべて歌を詠むというのが、日本古来の思想なのであった。おや、と思われたらどうか。「蟬」は良いとして、「かはづ」は虫なのか、と。そう、虫なのである。「虫」とは生きとし生けるものすべてを指す概念で、その中を鱗虫・羽虫・裸虫・毛虫・介虫の五種類に分類する。われわれ人間は、その裸虫に入れられている。その伝統に則って、『画本虫撰』にも今では虫と見なされない、蛙や蛇、とかげなどが採りあげられている。

ここで紹介する『画本虫撰』で採りあげられる虫は、次の三十種類。
 蜂、毛虫、馬追虫、むかで、けら、はさみむし、蝶、蜻蛉、虻、芋虫、松虫、蛭、ばった、蠅、ひぐらし、くも、赤蜻蛉、いなご、蛇、とかげ、蓑虫、兜虫、蝸牛、轡虫、きりぎりす、蠅、蛭、こおろぎ、蛙、こがねむし
 題材となる虫を二種類ずつ、見開きで一続きとなる絵の中に描き込み、虫を詠んだ二首の狂歌を対にして配する。この構成は木下長嘯子の作とされる『虫歌合』をふまえたものである。

狂歌師宿屋飯盛の編、喜多川歌麿の画。いわゆる狂歌絵本と呼ばれるもので、本書の最大の見所は美しい挿絵である。芋虫の体節を表現する空刷り、蝶の鱗粉・蜻蛉の羽の光沢・蛇の鱗を輝かせる雲英刷りなど、木版多色刷りの技巧を最大限に駆使し、一方で三色の墨色だけで闇に光る蛭を表現するなど、歌麿の絵を細緻かつ瀟洒に再現している。虫を愛でる伝統を踏まえたうえで、歌合わせを狂歌合わせにくだき、浮世絵版画の技術を凝らして絵本に仕立てるといった、江戸中期の文化の粋を示すものといつてよいだろう。

天明八年（一七八八）東洲斎写楽を世に出したことで知られる葛屋重三郎の刊行。末尾に、続編として鳥・獣・魚の部の刊行の予告が出ており、歌麿が貝を描いた『潮干のつと』と、鳥を描いた『百千鳥』が実際に出版されている。

（入口敦志）